私の生まれた家

中谷宇吉郎

青空文庫

私の郷里は、片山津という、加賀の温泉地である。今は加賀市になって、国際観光ホテルもあり、近くに立派なゴルフ場もある。まるで昔日の面影はない。しかし私が生まれた頃は、北陸の片田舎の小さい部落であった。村ともいえないところで、本当の地名は、作見村字片山津小字砂走である。村の下の字、そのまた下の小字であるから、部落の大きさの見当はつくであろう。五十年の間に、小字から四段とびをして、市になったわけである。

小字時代の片山津は、片側が薬師山、今一方の片側は、柴山潟という湖にはさまれた、一本道の村落であった。私の家は、呉服雑貨店をやっていて、湖側にあった。前は、一本道路に面した店舗になっていて裏庭は湖に面していた。

家はもちろん旧式の木造で、二階は格子のはまった部屋になっていたが、下はかなり新式に改造されていた。この土地では、まあ大きい店であった。雑貨部は、広い土間にしてあって、その中に、硝子張りの陳列箱が並べてあった。いろいろな土産物だの、花かんざしなどが、この陳列箱の中に並んでいるのが、美しかった。

呉服部は、腰高の畳敷で、普通のお客は、畳に腰かけて買い物をする。しかし反物などを買う客は、畳敷の上にあがり込む。そしていろいろな反物を、畳の上に拡げて、品定めに、一時間も二時間も坐り込んでいた。三十畳敷近くもあったと思うが、二、三人のそういう客に坐り込まれると、店いっぱいに、反物が並べられて、その間をぬって歩くのが、たいへんだった。反物を踏んで叱られるのは、毎日のことであった。

父はハイカラ好きであって、呉服部の一部にショー・ウインドーをつくった。幅一間ちょっと、深さ四尺くらいの小さいウインドーであったが、出来たときは、非常に珍しがられて、付近の村の人が見に来たくらいであった。

この頃でも、北海道の奥地へ行くと、こういう店屋を見ることがある。北海道の村というのは、非常に広く、中には、神奈川県よりも広い村もある。そういう村には、一場所、中心地があって、それを市街地といっている。この市街地の中に、都会のデパートの役目をしている店屋が、一つくらいは必ずある。そういう店を見ると、私はよく子供の頃を思い出す。

住居は、裏にあって、板敷の台所で、つながっていた。この台所は、食堂も兼ねていて、広さは、二十畳敷くらいもあったであろう。真ん中に大きい食卓があり、食事のときだけ、その周囲をぐるりとかこんで、茣蓙を敷く。家族や店の人たち、それに女中を入れて、十四、五人の大家内であったが、食事のときは、一人か二人店番を残して、あと全員が、この板敷の茣蓙に坐って、一緒に食事をした。家中のものが、皆同じものを食うということを、父は自慢にしていた。もっとも、食事は、今から考えてみれば、ずいぶん粗末なものであった。店になっている主家の二階の一部に、十畳と八畳とがつづいた座敷があった。ここには縁側もついていて、家で一番立派な部屋であった。しかしこれは客間であって、使うことは、滅多になかった。

二人の男の子が、一人は物理学をやり、今一人は、考古学をやることになったので、この家は、とっくに人手に渡してしまった。まだ家は残っているが、すっかり模様換えをしたので、今は昔の姿もない。それにしても、私も弟も家とはずいぶん縁の遠い商売になっ

たものである。

（昭和三十六年四月一日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店
1988（昭和63）年9月16日第1刷発行
2011（平成23）年1月6日第26刷発行
底本の親本：「中谷宇吉郎随筆選集3」朝日新聞社
1966（昭和41）年
初出：「朗」
1961（昭和36）年4月1日
入力：門田裕志
校正：川山隆
2013年1月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の生まれた家

中谷宇吉郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/